五烏経

現代語訳

高河 慧佑訳

五鳥経ごからすきよう

そもそも神社というものは、天地そのものを模型として表したものである。神は天地の間にあまねく満ち満ちていて、万物を造られ、すべての民を守護される。そして、天地に満ちる元気¹も、すべての生きとし生けるものも生命を持たないものも、何ひとつとして神に造られていないものはない²。

さて、この村の鎮守³である五鳥大明神⁴について、大昔には本地垂迹⁵に基づいて書かれた由緒の伝記があつたけれども、過去に何者かによって盗まれてしまった。いまさら繰り返して書くこともないけれど

¹ 中国の思想において、万物生成の源であり、世界を循環する気、エネルギーのこと。古くは易经や老荘思想が淵源である。本書の場合、陰陽の二気、五行の五気ともとれるであろう。貝原益軒『養生訓』では、元気は人間の体を流動する活力のようなもので、これが滞るとさまざまな病気になるとしている。人間の気は天地の気とつながっており、天地の元気を受けて生きているとする。人口に膾炙している言葉だが、要は「病は気から」ということを言っている。彼は神仏にむやみに頼らず、むしろ神仏・父母からいただいた命を大切にしよう説いている。普段から養生に努めて、病気を未然に防ぐこと、心に戒めておくべき教えであろう。まず自助努力あってこそその健康であり、敬神につながることである。彼の言葉で有名なのが、「医は仁術」である。神の御心もそれと同じである。

² 序文においてこの思想家は、この五鳥教というべき神話の要約をしている。

³ その土地の守り神。

⁴ わが高洲村の独自の神である。「大明神」というのは、本地垂迹説に基づいた神仏の尊称である。

⁵ 中世に起こった神仏習合の思想で、神と仏は一体であり、本来の姿（本地）は如来であるが、日本に神々として現れているのを垂迹という。自らはすでにさとりをひらいているが、衆生済度のために迹を垂れるという。『法華経』の本門と迹門、『大日経』の本地身と加持身に由来する。西洋でも土着の神々を聖人として取り入れるなどの例は見られるが、悪魔に格下げされるなど、その扱いは妥協を許さない排他的な面がある。ただ、土着の民族の努力で、古くからの神々を巧妙に保存している場合がある。エジプトのイシスは、聖母マリアと同一視されていた。ギリシア人は、キリストをユダヤ人のゼウスと呼んでいた。イスラム圏においては、このような思想的な動きは見られず、支配した土地に居住する異教徒の宗教を、ジズヤと呼ばれる税金を払うことで認めていた。存在は認めるが、宗教としては峻別していたということである。『コーラン』では、イサー（イエス）、マルヤム（マリア）、ムーサー（モーセ）などといって、啓典の民としてユダヤ教とキリスト教には親近感を持っていたようである。そもそもアッラーは、父なる神、ヤハウェと同一神である。日本人は概ね寛容な民族であるが、明治期に国学などの影響で、神仏分離・廃仏毀釈が起こるなど、極端な事態もあった。思想的・精神的退行を示した黒歴史である。いつの時代も、山口県の詩人・金子みすゞの「みんな違ってみんないい」という共生的姿勢が大切ではないだろうか。

も、歳月が過ぎて世の中が移り変わっていった後のことを考えると、筆をもってしてでない誰がこれを伝えることができようか。

そこで、村の年寄りの言い伝えを聞き伝えるところでは、第三十三代推古天皇^{いづくしま}の治世、^{いづくしま}「^{いづくしま}厳島大明神」が西域の国^のより神通^{じんつう}の雅な車^にに乗られて、五色の鳥^{ごしきからす}にひかせて空を飛び、日本の伊予国の石槌山に着かれた。しかし、その地にはすでに石槌権現^{いしづちごんげん}がおられたので、それからまた五色の鳥に乗られ、ついに伊保庄

。西暦593年から628年在位。仏教や儒教など、中国の先進文化を取り入れた聖徳太子を摂政とした飛鳥時代の賢帝である。

。イチキシマヒメノミコト。『古事記』でアマテラスとスサノオのうけいで生まれたスサノオの三人の娘の一柱。いわゆる宗像三女神として宗像大社や厳島神社で篤く信仰されているほか、全国的に祀っている神社は多い。海の神であることから、のちにインドの河の神サラスヴァティーと同一視され、仏教を守護する弁才天となる。護国の経典である『金光明経』にまことに美しい天女として登場し、人々の福徳を願われている。七福神の紅一点として弁天様と親しまれている。

。宗像大社一帯を指すのか、中国あるいはインド、果てはペルシアやエルサレムを指すのかは不明。

。超自然的な力、霊的な力。

。原典には「都率車」とあるが、貴人が乗る牛車のようなものである。御所車または源氏車。『源氏物語』で車争いと呼ばれる貴族同士が道をめぐって争うシーンがある。牛でひかせるのをここでは五色の鳥にひかせているのである。いわば古代人が夢想する飛行機である。

。一般的にはヤタガラスであって、三本足で黒いカラスであるが、わが五鳥大明神は五色のカラスである。ヤタガラスは熊野が有名であり、古事記において神武天皇の東征を先導した霊鳥である。本来わが国では、アマテラスと共に太陽神である。中国や朝鮮でも古代、三本足の鳥が太陽の象徴として信仰されていた。高句麗の壁画に、勇壮な鎧馬武士と共に、太陽の中に霊妙な三本足の鳥が描かれている。八咫鳥は日中韓共通の神であり、昨今の険悪な関係を解く架け橋となることを期待する。さらに、世界各地にカラスが重要な役割を果たす神話が多い。仏教においては、日天が持つ日輪の中に三本足の鳥がいる。また、賀茂神社の祭神である賀茂建角身命が化身した姿ともいわれる。カラスは非常に知能が高いことで知られており、古代の人々もそれを観察していたものと思われる。「慈鳥反哺」という中国のことわざもあり、カラスは年老いた親に餌を与えるという儒教的な孝行の徳も担っている。

。イワツチヒコノミコト。イザナギとイザナミの神産みの際の第二子とされる。石槌山は霊山として伝説的修験者である役小角が開山。「権現」も「明神」と共に、本地垂迹の尊称である。

島¹⁶に着かれた。しばらくご滞在されているうちに、五色の鳥がにわかには病いを受けられ、苦しみの叫び声を上げられてこう宣^{のたま}われた。

「わたしの名は五鳥^{ごからす}といい、東城国^{みやこ}において十二代の帝^{みかど}に仕え、数万年の齡^{よわい}を保っている。今際の時までも老病衰^{じょうしやひすい}というものを知らなかったけれども、盛者必衰^{じやうしやひすい}の始めあるものは必ず終わりあり、という世界の掟は逃れることができない。しかし、わたしの魂は中有^{ちゆうう}に留まり、あなたがたの命根^{みょうこん}長養^{ちやうよう}の守護神

¹³ 往古、伊保庄（室津半島）は島であったことは、地元¹³の知識人たちの間では定説だったようである。本州とは地続きではなく、唐戸の水道という水路で隔てられていた。そこにある時、鯨が迷い込んでしまい、付近の村人たちが助けて海へ帰してやったという微笑ましい伝説まで残されている。つまり、伊保庄も「宮島」だったのである。現在は宮半島である。

¹⁴ この時代、都は飛鳥の宮であるが、神武天皇以来のヤマト政権と見てよいであろう。

¹⁵ ヤタガラスは初代神武天皇から仕えていたと思われるが、ここでは21代雄略天皇から推古天皇ということになるのか。あるいは神武から推古まで断続的に仕えていたのか。

¹⁶ この世は無常であり、勢力のあるものにも、必ず衰える時が来るということ。言わずと知れた『平家物語』の冒頭である。

¹⁷ 仏教に四有という概念があり、衆生が生まれては死ぬことを繰り返す期間を四つに分けたもの。存在が生まれる瞬間を生有、生きている期間を本有、死ぬ瞬間を死有、存在が死んで、次に生まれ変わるまでの期間を中有という。この間、霊体ともいべき身体を持つ。唯識派のヴァスバンドウ（世親）の『俱舍論』に詳しい。中陰ともいわれ、葬式の後の四十九日もこの期間とされる。つまり、この伝説は輪廻転生説をとっている。しかるに、五鳥神は現在¹⁷は中有という霊界におられるが、いずれイエス・キリストのように復活し、再臨・顕現し我々を救済される。そして今現在も我々を守護しておられる。大本教では、中有界とは現世と天界の間にある霊界であり、五鳥神は現世の我々衆生を憐れみ、あえて天界には昇らず留まっておられると思われる。

¹⁸ 密教において、行者が入神する際に唱える護身神法という加持祈祷の言葉。次の五臓安寧という言葉とともに、私は護身神法以外で目にしたことはない。それゆえ、あえて訳さなかった。つまり長寿を約束されたということである。

となろう。わたしの姿が青黄赤白黒¹⁹と五つの色を現すことは、すなわち五智如来²⁰であり、五行²¹であり、五臓²²を守るといってわたしの神性の表れである。人間はもちろん、すべての生きとし生けるものまで、もろもろの病気わずらいを癒やして²³、あなたがたの五臓安寧²⁴の守護神となろう。」

¹⁹ 親鸞の『歎異抄』などでは、「しょうおうしやくびやくこく」と読む。次の五智と五行がこの五色の由来である。

²⁰ 真言密教の本尊であり、宇宙そのものであり真理である。曼荼羅に描かれ、東西南北と中央に五つの仏を配し、それぞれ五つの智慧を表している。すなわち、東は大円鏡智の阿闍如来、南は平等性智の宝生如来、西は妙觀察智の阿弥陀如来、北は成所作智の不空成就如来、中央は法界体性智の大日如来である。金剛界五仏。慈悲を表す胎藏界の五仏も同体とされ、憤怒相は不動明王を中心とする五大明王である。内容は違うが、浄土教にも五智が説かれている。空海の思想では、神々や諸仏は大日如来の化身とされる。ギリシアのプロティノスも、すべては「一者」という根源的存在から流出したものであるという。つまり、五鳥大明神の本地、本来の姿は五智如来、あるいは大日如来ということである。

²¹ 中国の陰陽五行説において、世界を循環する五つの元素のこと。木・火・土・金・水（もつかどこんすい）。これが五色に配当されているのである。現象界を説明する思想であり、木から火が、火から土が生じる様子を相生説、水は火に、火は金に勝つ様子を相剋説という。易学や中医学の基礎とされ、わが国では安倍晴明で有名な陰陽道として発展し、文化や習俗にも大きな影響を及ぼした。古くは春秋戦国時代の諸子百家のうちの陰陽家が起源である。仏教では地水火風空の五大が説かれているほか、西洋にも従来の地水火風の四元素に、アリストテレスがア以太ール（エーテル）という天界の物質を加えて五元素ある。奇しくも東西の思想が一致しており、世界が五つの元素で成り立っているという哲学は普遍性がある。

²² 人間の内臓も、五行説では五行にそれぞれ配当される。陰陽五行説が中医学（漢方）の基礎とされ、人体の説明や疾病の治療法につながっていることから、五鳥神は無病長生を司る医療神となっていると考えられる。

²³ 五鳥大明神は医療神、治癒神、無病息災の神である。前述のごとく太陽神でもあり、それに加え、後代には『日本書紀』の保食神（古事記ではオオゲツヒメ、故に五鳥神は女神とも考えられるが、筆者は性別を超越した神と考えている）と習合されており、五穀の神、豊穰神でもある。五穀も五行にそれぞれ配当される。

²⁴ 註18を参照。健康、心身の保護の約束。

と誓願²⁵されてたちまち亡くなられた²⁶。厳島大明神は深く悲しまれ、鬼門²⁷に当たって清浄な地に埋葬したいとおぼしめし、錦の打ち掛けを脱がれ、五鳥のなきがらを包み、波打ち際に置かれた。すると、たちまち丑寅²⁸の方角から強い風が吹き起こって、砂や石を吹き寄せ、五鳥を埋葬した所が三町²⁹の範囲が高き洲³⁰となった。これによってこの地域を高洲村と名づけた。厳島大明神がそこに翡翠³¹のかんざしを墓印に立てられると、自然に枝葉を生じて、陰陽二股の杉の大木³²になった。五鳥大明神は、この御神木に姿を変

²⁵ わが神のありがたいご誓願であり、慈悲の御心である。これは神との契約であり救済の約束である。めざましい医学の進歩によって、神のご誓願は漸進的に果たされているといえよう。誓願といえは、阿弥陀仏の「もし衆生が浄土に生まれないならば、わたしはさとりを開かずにとどまる」という本願があまりにも有名である。わが神のご誓願も、「もし衆生の病いがなくならないのならば、わたしも共に病いに苦しむ」という決意表明なのかもしれない。私はこれに加え、キリストが人類の罪を代わりに贖われたように、五鳥神も我々が本来受ける病気や苦しみを、すでに少なからず肩代わりされていると考える。というのは、キリストが父なる神から受肉して人として降臨したように、五鳥神も本地の五智如来から垂迹して五色の鳥となっているからである。そして、キリストが罪を引き受けられたように、五鳥神も病を引き受けておられるように思われる。そもそも古代イスラエル社会においては、病気は犯した罪の表れであり、イエスが罪を赦したことは、すなわち病が癒やされ、社会に復帰することであった。わが国の神道でも、病気になるのはその人に罪が附着してしまっただけからと考え、それを水や大幣などで清めればがれが被われ、たちまち健康を取り戻すいうものである。イザナギが黄泉の国のイザナミのもとを訪れたことでがれを負ってしまったため、筑紫の阿波岐原で禊をして、身についたがれを清めたというのは祝詞で奏上される通りである。西では水で洗礼を授け、東では水だけがれを祓う。水で清める、水に流すというのは共通する考え方である。イエスは罪を赦すことで人々の病を癒やし、生き返らせることまでした。それゆえ、五鳥神も我々の罪がれをも引き受けられていると見るべきである。仏教にも、地藏菩薩に代表される「代受苦」という考え方があろう。これらに共通するのは、究極的な自己犠牲の精神である。

²⁶ まるで『大般涅槃経』の釈尊の入涅槃と重なるようである。釈尊の死を惜しむあまり、大乘仏教では実はブツダは死んでいない、常住であるという願いからさまざまな経典が作られた。

²⁷ 北東の方角。陰陽道で鬼が入り出すといて忌み嫌う。おそらく鬼門を守護するためにここに祀られたのであろう。ちなみに、神出赤石の厳島神社も伊保庄近長の賀茂神社も、やや北東に向かつて鎮座している。後述する御神木があったと推定される第一の鳥居とお地藏様は完全に鬼門に向いている。金光教や大本教の良の金神は、祟り神から救いの神へと変貌している。

²⁸ 十二支で丑と寅の間、鬼門に同じ。

²⁹ 約300平方メートル。

³⁰ 土砂が堆積し、河川にできた盛り上がった陸地。仏教では洲のことを「ティーパ」といい、さとりの世界を迷いの河から逃れる島と喩えられる。

³¹ 緑色の宝石。古来わが国で珍重され、勾玉の素材として使われた。越国(新潟県)が有力な産地であった。

³² 往古はこの御神木がそびえ立ち、人々の信仰を集めていたわけだが、後述の通り現在は朽ちて残っていない。ちなみに、小鳥社の境内にある手水石の後ろに、ちょうど陰陽二股に分かれた木が生えている。神社の裏には、三本足を象徴するような三股の巨木も立っている。日本のスギの王者は、屋久島の縄文杉(なんと樹齢4千年)である。樹木に対する信仰としては、北欧神話の世界樹ユグドラシルが極まった感があるであろう。

えられたのである。ここに小さな社を建て、五鳥の宮と名づけた。ここを宮の上というのもこの時から始まる。

高洲村から五、六町³³ほど南の浜に、屏風岩^{びょうぶいわ}という霊石^{れいせき}がある。ここは厳島大明神が伊保庄島にご滞在の間に住まわれた所であって、今も小社がある。恐れ多くも厳島大明神は、その昔、正法^{しょうぼう}の世においては如来³⁵であったが、衆生済度^{しゅじょうさいど}のため一度女神の姿をとってこの世界に顕現^{けんげん}された。そのため下界の習いで、女の穢役^{えやく}³⁴も逃れられなかった。月の障りになられて、その不浄水を石の上に流された。その所を赤石^{あかいし}と名づけた霊石³⁸が今もある。

³³ 約500メートル以上。

³⁴ 釈尊が入滅してから、その後500年間の期間。仏・法・僧という仏も教えも僧団も保たれ、平和な世の中であるという。中世に末法思想という考え方が流行し、ブツダが入滅してから五百年間を正法、次の千年を像法、その後一万年を末法という。次第に仏法も廃れ、世の中が乱れてくるという。いわば仏教における終末思想である。

³⁵ さとりをひらいた仏のこと。真如の世界から衆生済度のために、迷いの世界に來った存在という意味である。

³⁶ 生きとし生けるものを救おうとする神仏の御心。

³⁷ いわゆる女性の月経、生理。

³⁸ 赤石は般若姫伝説と混合しているが、おそらくこちらがオリジナルである。驚くほどの巨石に、本当に血が流れたあのような赤い紋様がある。周囲にも巨石が連なり、厳島大明神が終の住処とされた宮島の弥山頂上の巨石群と近似している。無関係ではないであろう。小鳥社の境内にある霊石も、神霊宿るものとして信仰されていた磐座である。小鳥の山の頂上付近にも巨石が散見される。霊水と伝わる井戸からさらに斜面を登った先に、石垣が積まれた古代の祭祀場の跡のような場所があり、頂上には熊野のゴトビキ岩を思わせる巨岩がそびえ立っている。世界に目を向ければ巨石崇拜の例として、イギリスのドルイドたちが信仰していたストーンヘンジ、アボリジニの聖地であるウルル（エアーズロック）がある。

ところで、巖島大明神は伊保庄島に着かれてから、どうも御心持ちがすぐれなかった。薬になる水を求められたが、付近に水はなかった。「さて、どうしましょう」とお考えになり、石の上に登って、三日三夜の間、結跏趺坐^{けっかふざ}して水天の咒^{まじ}を唱えられた。すると海の向こうから、立烏帽子^{たてえぼし}を被り、狩衣^{かりぎぬ}を着た靈妙な人が忽然^{こっぜん}と現れ、石の上にお腰をかけられて、「ここに水があります」と指差された。その所をかんざしをもって掘られると、たちまち清らかな水が湧き出た。今も伝わる見石清水^{みいしきよみず}という湧き水はこのことから由来する。そしてその靈妙な人に、「あなたはいったいどなたで、どちらから来られたのですか」とお尋ねになった。すると靈妙な人は、「わたしは大神宮の分魂^{まご}で、蛭子三郎^{ひるこ}という者です」と答えられた。蛭子三郎が御腰をかけられた岩を、岡田蛭子と名づけて今も残っている。

³⁹ 仏教の修行者が瞑想する際にとる足の組み方、姿勢。

⁴⁰ インドのヴァルナという水の神が仏教に取り入れられた。真言は「おん ばらだや そわか」である。

⁴¹ 貴族が被る帽子。まさにカラス帽子である。熊野那智大社の神職は、祭りの際、ヤタガラスを模した八咫烏帽なる帽子を被るそうである。

⁴² 貴族の普段着。烏帽子とセットである。

⁴³ 現在、地元の鮮魚店があるところの崖つぶちにこの霊石があり、その下から霊水が湧き出ている。この辺り一帯を「見石」という。昔は酒屋が水をもらいに来るなどしていたといい、今まで一度も涸れたことがない神聖な水である。鮮魚店の方が大事にされているので安心である。先の赤石の屏風岩とは別の霊石である。

⁴⁴ 大神宮とは普通伊勢神宮であるが、なぜヒルコがそのわけみたまであることは不明。あるいは蛭子神の総本社とされる兵庫県西宮神社のことかもしれない。アマテラスとヒルコは双子であったという説がある。真偽の程は不明であるが、もしそうなら分魂と言っているのも頷ける。

⁴⁵ いわゆる七福神の恵比寿様。古事記ではヒルコは、イザナギとイザナミによる国産みの初子であったが、障害児であったため葦船に乗せて海に流したとある。オオクニヌシの長子であるコトシロヌシともされるが、私は海からやってきて薬水を得させたという点は、むしろスクナヒコナを思わせるところがあると思う。この神も海の神であり、イチキシマヒメと共通する。

大昔、高洲村は田畑や人家もまばらで、浦にただ漁民の小屋があるくらいだった。そうした清らかな地なので、巖島大明神はお気に召されて、ずっとお住みになりたいと思われていた。しかし不思議なことに、だんだんと戌亥いぬいの方角が自然に本州と近づいてしまった。巖島大明神は穢氣不浄えきを嫌われて、さらにここからまた、東方の王城に近づいて、どこか清浄な島を見立てて住処を定めたいとお考えになった。そして波打ち際の石上に登られ、汐しおの満干をはかり、遙かな沖に向かって船を乞われた。すると、東の海から五色の帆をかけ、瑠璃るりで屋根を葺いた船ふねが石岸に着いた。巖島大明神は大変お喜びになり、打ち乗られた。そして今の巖島に着かれ、末世まっせの衆生済度の大願を成就された。このいわれをもって、この場所を船乞浦斗ヶ岩ふなごいうらとがいわと言ひ伝えられている。

そののち、一千余年の星霜せいそうを経て、五鳥の小社も朽ち、陰陽二股の御神木も朽ちてわずかに枯れ木が残り、朽木のみであった⁵⁰。その頃から高洲村は徐々に人家も増え、田畑も作り、村里が栄えていた。ときに

⁴⁶ 北西の方角。十二支で戌と亥の間。

⁴⁷ もともとイチキシマヒメは宗像の神である。沖ノ島などが神聖視され、現在も女人禁制であり、男子も褌をしなければ立ち入り禁止にされていることなどから、人の寄り付かない清浄な島を好まれると思われる。神道ではケガレを避け、祓い清めることが重視される。

⁴⁸ 屋形のある和船である。瑠璃とは深みのある青い宝石、ラピスラズリのことである。屋形の屋根を瑠璃でふき、五色の帆をはためかせた想像するも見事な船である。

⁴⁹ 註34を参照。正しい教えが廃れ、世界が滅びに向かう時代である。五十六億年後に現れるという弥勒菩薩を期待したものである。

⁵⁰ 前述の通り、古くは御神木信仰があったと思われるが、遺構は定かではない。現在、麓の第一の鳥居とお地藏様がある所を古名を「美塚」といい、おそらくここであったと考えられる。

ある夜、村人一同の夢の中に、五鳥大明神が御頭に宝冠⁵¹を被り、五色の天衣⁵²などを纏われた姿で現れ、夢中神勅⁵³にこう告げられた。

「わたしの社をここから南の山に移して、この朽木をもってわたしの姿を刻み、安置して登礼しなさい。わたしが五色を現しているのは、この世界の空劫⁵⁴が終わり、次の世界の成劫⁵⁵の初めの時、黄なる風⁵⁶を生

⁵¹ おそらく、大日如来が被っている金剛界五仏が彫られた冠である。五仏宝冠。ここでは鳥の神が、人の姿をとって現れている。

⁵² いわゆる、天の羽衣である。遥かないにしえの時代、御祖の前に鮮やかな五色の鳥として垂迹して現れた神が、この近い祖先の夢の中では、五色の衣を纏った叡智界の本来の姿で現れているのである。

⁵³ 神託、神からのお告げ、啓示。

⁵⁴ 仏教における四劫という概念。世界が成立して破滅するサイクルの四つの期間。世界が始まる時を成劫、世界が存続する期間を住劫、世界が壊滅に向かう時を壊劫、世界が終わり何も無い期間を空劫という。これも『俱舍論』に詳しい。思うに、この哲学は前出の四有という概念と軌を一にしており、つまるところ存在は永遠ということにほかならない。神が死んで復活するという観念は、無論キリストや、エジプトのオシリス、ギリシアのディオニュソスなどと類似する。永生不滅の霊鳥としては、不死鳥フェニックスとかなり重なるところがある。

⁵⁵ 註54を参照。天地初発の瞬間。

⁵⁶ 『俱舍論』に、「成劫従風起（成劫は風の起る従り）」、現代語訳「成劫はその空しい空間に有情の業力によって微風が吹きそめるときから」とある。おそらくここが出典である。なぜ初めに生じるのが黄色い風なのかは、五行のうちで土である黄色は中心を意味し、鎮座する神は黄龍、あるいは麒麟であって、密教では大日如来を表しているからであろう。

じて、それが次第に五色の風となるからである。それは、すなわちわたしの魂魄こんぱくである。それゆえ、天地の間、無量無辺⁵⁷、森羅万象⁵⁸のうち、何ひとつとしてわたしの神力じんりきによらないものはない⁵⁹。」

そう宣われる御声とともに、みな夢から覚めた。村の人々は不思議に思い集って、山の上に神社を建て

て、かの朽木にて垂迹の御神体⁶⁰を彫刻し、祭礼し奉った。靈験^{れいげん}⁶¹が日に日にあらたかになっていって、近

くからも遠くからも人々が歩みを運んで、諸願成就したという。しかし、そのことがあった年月はわからな
い。ただ、神社の棟札^{むなふだ}⁶²を案ずるに、元禄時代⁶³のこのようだ。それから数十年の歳月を経て、社殿もこ

とごとく壊れて、雨風を防ぐこともできない有様になってしまった。これにより、世間の人々に微志助成^{びしじよせい}

⁵⁷ 計り知れないほどの数と大きさ。無限。

⁵⁸ 宇宙で起こるすべてのものごと。

⁵⁹ つまり、五鳥大明神は世界創造者であり、同時に宇宙そのものである。普通神道では、アメノミナカヲシをはじめ、造化三神による天地開闢が説かれるが、当神話では五鳥神が一切の造物主である。あるいはアメノミナカヲシ、プラトンのいう「デミウルゴス」、アリストテレスのいう「不動の動者」、プロティノスのいう「一者」と同一であろうか。とにかく世界の根源「アルケー」にほかならない。天地創造という点でキリスト教やイスラームなどの一神教と相通するものがあり、宇宙は神そのものであり、我々もその一部であるという思想は、梵我一如を説くウパニシャッドの哲学などの汎神論に近い。そもそも、宇宙の創造から破壊に至るまでのサイクルは、ヒンドゥー教のブラフマー・ヴィシヌ・シヴァの三神（トリムールティ）の關係に類似するものである。それを当神話では、五鳥大明神という唯一の神に昇華させている。この世界を循環型・円環型と捉えるのは、穀物や植物の再生を観察した農耕社会のものである。ちなみに、サラスヴァティーは創造神ブラフマーの妻とされており、五鳥神と敵島神との關係と符合したようになっている。また、道教の「道（タオ）」や太極の思想も、万物を生み出す根源的存在を説くものである。仏教では通常創造神を認めないが、五鳥教ではすべての思想を神に託している点に獨創性がある。この宇宙は神であり、我々は神のうちで輪廻を繰り返している。さらに、神ご自身も計り知れない時間の中で、永遠に生まれ変わりを繰り返す不死鳥である。

⁶⁰ 小鳥神社を管轄する賀茂神社の宮司でさえ見たことはない。話の内容的に仏像としては大日如来であったと思われるが、ここでは垂迹とあるので、五色の鳥である可能性もある。人々が夢で見た神の姿をそのまま彫刻したのかもしれない。

⁶¹ 不思議な力、神仏のご利益。

⁶² 建造物に打ち付ける建設年数や棟梁の名などを記した札。

⁶³ 西暦1688年から1704年まで。

を勧め、建て直すことを計画しているところである。^{こいねがわ}希くは、一粒一銭の浄施^{じょうせ}を集め、すぐにでも造営が叶えば、神力はますます増して、神と人との心の働きもいっそう強くなるであろう。神社の始まりについては、村の年寄りの言い伝えとして耳によく聞いているけれども、いま記さないでいられようか。ありがたい言葉を集め、崇敬の便りとすることを示す。

ときに、寛政酉元年霜月下旬⁶⁴

五烏社ノ地主⁶⁵ 謹言

⁶⁴ 西暦1789年、霜月は11月。

⁶⁵ この五烏社ノ地主という人はよくわかっていない。地主というからは賀茂神社の宮司のご先祖様かと考え、尋ねてみたが不明。神社の周りの土地は私の家が所有しているが、このような書物を書ける者がいたかどうか・・・。原典の古文書の表紙の端に「河野百太郎」とあるが、この人は五烏社ノ地主ではない。なぜなら、別の小烏神社の沿革について書かれた古文書において、明治22年に小烏社を再建した時の総代を務めた人物として名が記されているからである。だから、既存の伝説を筆写した人に過ぎない。この伝説は、あくまで「村老の言い伝え」であり、村民の共通理解であったと思われるが、多分にこの五烏社ノ地主の思想が活きていると感じる。いまだに神秘に包まれている思想家である。

あとがき

このたびは本書を手にとってくださり、まことにありがとうございます。筆者である私は、この高洲村の小鳥神社のお膝元にある家の末裔として、神様から生を受けました。小鳥のことを詳細に書くのは、後にも先にも自分しかいないと思い、熱意と使命感を持ってこの仕事に臨んでおります。あまり知られていませんが、小鳥神社は柳井市の中でも屈指の景勝地であると思っています。「秘すれば花」と世阿弥は申しましたが、いささか秘しすぎた感があるので、今回みなさまに小鳥神社をご紹介いたします。いつの頃からか、ごからす五鳥をこからす小鳥というようになったといえます。代々小鳥神社を信奉してきたという誇りがあるほか、幼少時代から神社の周りの山を駆け巡って遊んでおりました。幼い頃はどんな神様が祀られているのかよく知らなかったけれど、いつでも、どんな時でも、小鳥様は私と共にありました。私の心はいつも小鳥にあります。

子供の頃から鳥が大好きで、いろんな小鳥を飼ったり、野鳥の図鑑などをよく読んでいました。神社の神様がカラスの神様だと知った時、自分が鳥が好きだったことが運命だったような気がして嬉しかったです。実際、小鳥と赤石の周辺には、多くのカラスがまるで神様の御使いかのごとく生息しています。小鳥の山にはキジやフクロウまでいて、近くの土穂石川には、トンビが優雅に飛んでいるほか、カモやカワウが群れをなし、サギやハトやスズメ、セグロセキレイ、まさかのカワセミまでいます。小鳥の山からは毎年ウグイスの鳴き声が聴こえてきます。冬に庭の木にみかんなどを差しておけば、メジロやヒヨドリ、ジョウビタキなどが集まってきて目を楽しませてくれます。小鳥は多くの鳥類に恵まれ、まことに自然豊かであります。一度母が「白いカラスを見た」といい、私も遠くからそれらしきものを見た覚えがあります。アルビノという突然変異のカラスだったのかもしれない

れません。瑞鳥であります。私には、小鳥の鳥たちにとどまらず、さまざまな生き物が生息している生態系、自然そのものが小鳥様とつながっているように思え、友達や家族だと思っております。

自宅の庭から見上げる小鳥の山の光景に、幼い頃からずっと憧れてきました。何もわからない幼心にも、何か神聖なものを感じるところがあったのでしよう。今でもその光景は変わらず、30年経った私の気持ちも変わっていません。小鳥の山には暇さえあれば登って探検するのが楽しみでした。子供心にも心が安らぐ気持ちや、ワクワクする気持ち、ここはまさに楽園だと思っております。少々危ない所まで入り込んで探検してました。奥の奥に行ったところに、少し開けた場所があり、鳥の楽園と名づけて巣箱を設置して帰ったこともあります。毎年の夏祭りには、神社の旗を持って神輿を乗せた軽トラに乗せてもらい、お小遣いとして500円をもらって喜んでいたものでした。小鳥神社には懐かしさや、まるでゆりかごの中に還るようななんとも言えない気持ち、信仰や郷愁や憧憬といったような一言では言い表せないさまざまな感情を持っています。とりわけ、神社の下からまっすぐに伸びる階段の先にある光景を見ると、まるで天国に続いているように感じ、涙があふれてきます。あの向こうに神様がいる、家族や遠い祖先と繋がっているような気がして、感慨深くなるとも言えません。なんとも言えないとしか言えないのです。

私は幼い頃に、小鳥の山からさらに続く遙かな山をどんどん登っていき、天まで続く巨大な階段を登って行って、眩く輝く天の門に到る、という夢を何度か見ていて、最近になってそれと全く同じ夢を見て、不思議なこともあるものだと驚きました。自分には靈感といった類いのものは無縁だと思っていたから哲学を志してきたのですが、他にも小鳥にまつわる神秘的な夢を何度

も見て、この世にはそのようなものもあるのだと実感し、自分がそれにあずかることができなくて光栄です。元を正せば、この古文書に書いてある通り、わが祖先の夢にも神様ご自身が現れていることから、特におかしなことでもないのかもしれないかもしれません。夢に前述した白いカラスが出てきたこともあります。神様が呼ばれているのかもしれないかもしれません。夢はユング心理学では、人類が共有する集合的無意識とつながっていて、それが各地の神話や伝承として現れているとします。ユングが唱える無意識や集合的無意識は、この伝説とも関わりの深い、唯識派の仏教哲学者たちが説く「マナ識」や「アーラヤ識」という人間の深層心理に対応するものでありましょう。古来より夢は霊的なもの、神的なものと解されてきました。この伝説もそうですが、神からの啓示として捉えられることも多いです。プラトンの哲学に「アナメネシス 想起」という観念があり、人間はすでに生得的に真理を備えているが、生まれ変わる時に一度忘れさせられ、再び学ぶことでそれを思い出すというものがありません。私はこれがとてもロマンティックに感じ、世界が美しく感じるようになりました。私が見た夢も、前世あるいは祖先が見てきた記憶、天界へと至りアイデアに触れる道のりであるのかもしれませんが。

小鳥神社については、地元の郷土史家であった故尾川恒祐様つねすけが、主に民俗学的見地から研究されていました。そのレポートを読んで私は初めて伝説の詳しい内容を知りました。「すごいことが書いてある！」と驚愕しました。それまで柳井図書館出版の『柳井昔ばなし』という、民話を集めた平易な本で知った知識しかありませんでした。それでもその本は、省略している部分は多いものの、尾川様の報告に基づいた現代語訳でした。尾川様に一度お会いしたく思い、ゼンリンの地図で調べて黒島下のご自宅を訪ねたところ、表札はあるもののどうも人の住んでいる気配がなく、近所の方に尋ねたところ、すでにお亡くなりでご子孫

の方もいらっしやらないと聞き、非常に残念に思いました。それから尾川様のレポートを研究して、拙い解説書のようなものを書き、氏神様である伊保庄近長の賀茂神社の藤井宮司様に見ていただいたところ、原典である大元の古文書を「これは高河さんが持っていた方がいい」と託してくださいました。この本はその古文書を基礎とし、内容は同じ別書や、近所の方からいただいた別の古文書、もちろん尾川様の記述も参照しながら訳しています。尾川様がいらっしやらなければ、私は小烏神社の研究までつながらなかったでしょう。私は、自分は尾川様の跡を継いだ、ひいては五烏社ノ地主の後継者だと自負しております。ただ、尾川様の記述には数点誤読、誤植があり、『柳井昔ばなし』にも間違った内容で収録されています。漢字を一つ読み違えたただけのようなものなのですが、全く意味が違ってしまいます。それを今回、正確な形で訳すことができたと思っています。尾川様は郷土史や民俗学の方面の方でしたが、私は宗教や哲学の人間なので、そちらの強みは活かせたと思います。とはいえ、私は現在36歳ですが、今までギリシア哲学やキリスト教など、西洋の思想に入れ込んできた傾向があるので、仏教や陰陽道については不備な点があるかもしれません。これからまだまだ研究していきたいと思っています。

推古天皇の時代には、最澄や空海はまだ生まれておらず、純密と呼ばれる正当な密教は当然日本には伝わっておりません。雑密と呼ばれる役小角や泰澄などの一部の密教は入っていた可能性はありますが、大日如来や五智如来は伝わっていなかったであろうと思います。ただ、推古天皇の摂政であった聖徳太子は、政治家でありながら自ら『三経義疏』を編み、制定した冠位十二階も五行説に基づいて発案したものであります。ちなみに、小烏の山のもっと向こうの山にある、真言宗の般若寺は、聖徳太子が師事した高句麗の僧・慧慈が創建したものと伝えられております。尾川様が指摘されていることではありますが、巖島神社の創

始者である佐伯鞍職も、市杵島姫命を推古元年に祭祀したと伝えられており、「伝説と思っても捨て難いものがある」、と言われております。推古朝はいわば黄金時代であり、神仏の加護も厚いものであったのでしよう。聖徳太子は十七条憲法をはじめ、仏法という普遍的理法によって国を治めた帝王であります。すなわち、プラトンが待望した哲人王にほかなりません。彼の辞世の言葉は、「世間虚仮、唯仏是真（世間は虚しいもので、ただ仏のみが真実である）」であります。後にも先にも、これほど篤信的な帝王もいないのではないのでしょうか。推古天皇も聡明であったと伝えられるばかりでなく、崩御される時に、後継者の皇子たちに帝王としての教訓を遺言されるなど、太子に負けず劣らずの賢帝でありました。神社の創立年代と密教伝来との齟齬については、普通に考えれば創作と言われても仕方ないところもありますが、それでも私は、この伝説を一字一句まるごと信じております。首尾一貫してまるごと鵜呑みにし、それでいいと思っております。事実であり、一点の誤謬もない真正銘の真理であると思っております。なにしろ、神様がなせる業なのだから、時空などひとつ飛びです。信仰には哲学と違って疑いはいりません。もし疑心を挟むなら、それこそ信仰ではなくなってしまうです。

ちなみに、小鳥神社の伝説は二つあり、もう一つは天武天皇の時代に、伊保庄で赤い三本足の鳥が生まれたという短いものです。鳥を朝廷に献じたところ天皇はたいへん喜ばれ、直ちに元号を「朱鳥あかみどり」とされたということです。確かに、日本書紀にその記述があります。同時に、都を飛鳥浄御原宮あすかのきよみはらのみやと名づけたといっています。そのことから、この地域を「鳥王庄うおうのしょう」と名づけて、それが訛って伊保庄いほのしょうと呼ばれるようになったということです。地元の間人は「いほのしょう」とは言わず、もっぱら「よのしょう」と言います。「うおうのしょう」と早口言葉のように連続して言っていくと、自然と「よのしょう」になっていきます。鳥王庄の

名残りが認められます。天武天皇も五行説など陰陽道を学ばれ、政治や合戦の際には卜占を重視されたそうであります。ご自分は火性人間だと考えられ、赤色を好まれたそうであります。このもう一つの伝説については、また後の著作にて詳説したいと思います。いずれにしましても、カラスの神霊であります。

古文書の著者である五烏社ノ地主については、明らかに当時の知識人であり、とりわけ密教に造詣が深かったことを伺わせま
す。あるいは密教の僧侶や修験者であったのかもしれませんが、賀茂神社の藤井宮司様のご先祖様かと考え、尋ねてみましたが、
よくわからないとのご回答でした。しかし、賀茂氏の祖神である賀茂建角身命かもたけつぬみのみことが、ヤタガラスの化身と伝えられていることか
ら、寛政時代の賀茂一族の方であったのかもしれませんが。カラスの神という点で、賀茂社と小烏社は無関係には思われないので
す。また、注釈においても書きましたが、この古文書の表紙の端に「河野百太郎」と記されており、表紙の年月と結びの年月が
一致しておりますが、この人は五烏社ノ地主ではありません。なぜなら、神社の沿革について書かれた古文書に、明治22年に
小烏社を再建した時の総代を務めた人物として名が記されているからです。尾川様と同じく地元の研究であった村上省吾様の
『伊保庄の歴史』にも記載されております。ですから、河野百太郎は既存の伝説を筆写した人に過ぎません。それでも、非常に
達筆で書かれており、思想的にもある程度の教養があったものと思われます。そして彼は、この伝説をリレーのバトンのように
引き継いでくれました。江戸の五烏社ノ地主、明治の河野百太郎、昭和の尾川恒祐、平成令和の私、とバトンが受け継がれてお
ります。この河野百太郎という人は、おそらく私の家の親戚のご先祖様であります。現在、小烏社周辺の山地は私の家のもので
ありますが、この親戚の河野氏は士族の末裔であり、代々小烏社の総代を務め、社会的にも権勢を極めておりました。今も昔も

うちよりも優勢な一族であります（苦笑）。わが家も明治以前は姓を「河野」と名乗っておりまして。憶測ではありますが、高洲の河野だから、略して「高河」と改姓したのであろうかと思えます。厳島大明神が最初に降り立った所が、豪族河野氏の根拠地であった伊予の石鎚山であること、そして石鎚山が密教の霊山であることは、何か含意しているのかもしれませんが。ちなみに、わが家の寛政元年の当主は、おそらく「弥太郎」であります。この五烏社ノ地主なる哲学者は、神道・仏教・陰陽道を融合させ、さらに宇宙の創造や循環を、すべて唯一の神に依拠させるという独創性を見せております。この五烏社ノ地主という人物は以前謎として残されています。なぜ名を伏せたのかも不明で、神秘のベールに包まれております。村上省吾様が指摘されてい

ることですが、「伊保庄は両部神道の影響が大きく、本地垂迹や神仏習合の伝統が強く残った」ということを書いておられます。それはこの五烏神話にも色濃く表れております。関連性があるものとして、宮島の御烏喰神事に代表される神鳥信仰や、弥山の巨石信仰（小鳥の山にも巨石・霊石がゴロゴロしています）を睨んでいるのですが、これもきちんと調査して後日詳説したいと思っています。尾道や防府にも五烏神社があることなどから、宮島を震源地として、安芸から周防にかけて、ローカルな五烏教とでもいべき集団があったのかもしれない。五烏教といえるほど発展してはおりますが、はつきりいつて仏教や五行説は後付けであり、往古は素朴な御神木信仰や磐座信仰、霊山信仰や神鳥信仰のような自然崇拜のみがあったものと考えられます。註37でも触れましたが、小烏神社境内の奥の小道を行った先に、「いかなる旱魃にも絶ゆることなし」と伝わる霊水の井戸があるのですが、そこから斜面をさらに登った先に、少し平坦な場所があり、石垣が積んである古代の遺跡のような跡があります。頂上には熊野のゴトビキ岩を思わせる巨岩がそびえ立っており、それを祭祀するように石垣が囲んでいます。昔は城跡か住居跡かと思っておりましたが、現在は古代の祭祀場の跡だと思っております。思いますに、縄文・弥生の時代からの信仰形態ではな

いかと考えております。私は小鳥に参拝した折には井戸からそちらの方にも拝んで、自宅からは子供の時と同じような憧れの気持ちで山頂を見上げております。

このたび、尾川様や五鳥社ノ地主の遺志を継いで、この伝説や小鳥神社を広めることができることを、非常に嬉しく思っています。神様のお役に立てたという冥利に尽きます。五鳥様は病氣治し、疫病封じの医療神なので、昨今のコロナウイルスという未曾有の被害に抗するものになる、いや、必ず神様は疫病を鎮めてくださいます。もつとも、ご承知の通りアマビエという神に先を越されてしまいました。もちろん、通常の病氣や障害で苦しんでおられる方の救いになればと思います。注釈にも書きましたが、病氣が治ったら、貝原益軒がいうように、普段から内欲（三大欲望と煩惱）を慎み、外邪（身体に害のある外部の環境）を防いで、あらかじめ病氣を防ぐ努力をしましょう。『養生訓』は一読に値するものであります。現代の医者に訊いても、養生訓の内容は現代医学でも通用するものであるそうです。さらに、後世には五穀豊穡の神である日本書紀の保食神うけもちのかみ（古事記ではオゲツヒメ）と習合されているので、農業関係者の方にもおすすめてです。といたしますのも、わが家もともと農家で、その恩恵は極めて大でありました。毎年実る米は一等米でありましたので、神顕あらたかであることは疑いを挟む余地はありません。食と健康は人間の基であります。当時の人々の切実な願いであり、今でもそれは変わりません。ましてや古代の人々となると、より深刻な問題であり、人類にとって最も古い普遍的で根本的な願いでありましょう。しかも、「諸願するに成就せざることなし」、「我が神力に叶わずということなし」でありますので、万能の神、全能の神であります。ここに、山をも動かす固い信仰心が試されているのであります。現時点では、高洲村のローカルな鎮守様として止まっておられますが、「万民を守護される」

お方でありますので、民族や言語の垣根を越えて救いを渡される神様であります。神様の衆生済度の御心を、世の多くの人々が心のよすがとしていただけたら幸いです。さあ、神様の御手をお取りください。願わくは我らと皆共に、安心立命の境地に至ろうではありませんか。

卑近なことではありますが、テレビゲームで『真・女神転生』という世界の神々や妖怪を仲間にして遊んでいくゲームがあり、ヤタガラスやサラスヴァティーを仲間にして遊んでいたものです。わかたの神様と共に冒険して戦っていくので、私にとって夢のゲームであり、とても楽しかったです。最近でも、『ペルソナ』という同系列のゲームを楽しんでおります。やはり、ヤタガラスとサラスヴァティーを最後まで使っています。こちらはダークな世界観の女神転生とは違い、若者たちの友情や絆を描いた快活なものではありますが、どちらにもハマってしまいました。自分の信仰する神様と一緒にゲームをクリアする喜びはひとしおであります。メジャーな信仰を持たれている方はもとより、けっこうマイナーな神様や妖精も登場するので、田舎の小さな祠を信仰されているような方にもおすすめてです。よろしければ、ぜひお楽しみください。アトラスの回し者などではございません(笑)。私にとって当古文書は、ペルソナでいうところの、パレスという心の世界の中核、「オタカラ」にほかなりません。私にとってすべてであり、命をかけているものです。

注釈については、今まで学んできた知識を総動員した上、より正確を期するために、『広辞苑第七版』、『岩波哲学・思想事典』、尊敬する中村元先生の『佛教語大辞典』、國學院大学の『神道事典』を参照し、さらにネットも駆使しました。不備な点があれば申し訳ありません。この本は、現時点ではまだまだ未完成であります。それはひとえに私自身の浅学非才、不精進ゆえ

であります。学術的なことも、フィールドワークの点においても、まだまだ調査・研究しなければならぬことがあります。そして、自分自身の信仰や哲学も未熟であります。つたない文章でありますので、誤りや欠点がございましたら、ご指摘やご批判、補完してくださると幸いです。そして、よりいっそう神様の御目になれたものになればと存じます。

私には絵心などなく、こうした学術的方面でしか小鳥に寄与することができません。私一人ではできることは限られており、絵画や彫刻、音楽といった芸術的才能のある方が信仰をお持ちになって、小鳥を盛り上げてくだされば幸いです。後世の人々にそれを託します。あるいは、私自身が生まれ変わって、次の生でまた小鳥と巡り合い、それを果たすやもしれません。

最後に、ここに至るまでにお世話になった方々へのお礼を申し上げます。小鳥の研究のきっかけを作ってくださいました。亡き尾川恒祐様、もったいなくも貴重な古文書を託してくださいました。賀茂神社の藤井宮司様、同じく蔵書の古文書を快くコピーをしてくださった同村の工様、解読できない箇所を教えてくださいました。山口県文書館のく様、この遙かな伝説、教えを時を超えて伝えてくれた五鳥社ノ地主、今まで小鳥神社の存続に力を添えてくれた名もなき同郷の人々、そしていつもどんな時でも見守っていてくださる神様、心より感謝いたします。

トップページのロゴの油絵は、母の美術の恩師であった故高林泰先生の遺作であります。先生は弁才尊天をイメージした白い龍を描いてくださいました。ビールと刺身だけ受け取られ、かたじけなくも無償で描いてくださいました。下界より感謝申し上げます。

あとがきのところを、なにやら自分の個人的主張が多くなってしまいましたがお許しくださいますようお願いいたします。

言挙げしないのが日本古来の美德であります。私自身もただの凡夫、罪人、愚者であります。大事なことは柿本人麻呂のように「言挙げす我は」であります。堅苦しいことばかり書いてしまいましたが、私は本当は、荘子のような常識や固定観念にとらわれない、何ものにも執着しない自由な境地が好きであります。『荘子』冒頭に出てくる「鵬ほう」という大鳥の背中に身を委ねて、自由に生きたいと思う次第です。それはそれこそ、五色の鳥、わが神の背中に乗せていただき、何もかもから解放された天空へと飛翔したいものであります。

何をもって幸せとするのかは人それぞれと言われますが、やはり宗教というものは、魂の救済という点で他のものとは違うと思います。宗教や哲学は、死や罪や苦といった人間の根本問題、いわゆる生老病死を解決するものであります。儂い地上のもの比べ、神は常住、永遠であります。それを頼みとしないで何をよりどころとできましようか。小鳥の神はご遺言として、死んでもこの世に近いところに留まって、我々の守護神となると誓っておられます。私はそこに、大切な人を失った者の嘆きと、自分をずっと見守っていてほしいという願いを見出すのであります。古代ローマの神学者・アウグスティヌスは、「幸福な生活とは、あなた（神）を求めて、あなたによって、あなたのために喜ぶことである」といっております。それと時を超えて呼応するかのように、「本当の心の憩いの場は、神仏の御前にあるように考えられます。心の宝は信仰であります。」と言ひ残された尾川様の言葉を胸に。

2022年5月30日 月曜日 小鳥の山を仰ぐ高洲村の自宅にて 五鳥社ノ産子 高河ヨブ慧佑